

せいぎゅう 「聖牛」ってな〜に!?

日本は雨の多い国で、川がよく氾濫はんらんしました。昔の人は材木と石を使って堤防をつくり、人々の命や財産を守りました。

「聖牛」は戦国時代に武田信玄が考えた物だと言われています。これは奈良時代からある「牛柰たけだしんげん」「猪子うしわく」と呼ばれるものを頑丈がんじょうに改良した物だと言われ、丸太を三角に組立てて、蛇籠じゃかごで重しをした物を川原に設置します。大雨が降って川の水が増えた時に、水の流れを弱め、堤防こわが壊れるのを防ぎます。また、水をはねつけるのではなく、水の勢いを利用して自らの躯体を沈めるので、洪水にあうたびに安定を増します。これほど簡潔な構造で、これほど巧みに水の勢いを利用した水制は世界でも例がないと言われています。



蛇籠じゃかごは飛鳥時代に中国から伝来したと言われています。鉄線てつせんで編んだかごに石を詰めて、堤防に並べたり「聖牛」の重しにしたりします。年月がたつと草が生えて、石と石の間すきまは生物のすみかにもなります。

川の中で牛みたいに角をだしてどっしりと構えているから「聖牛」って名前がついたんだ。



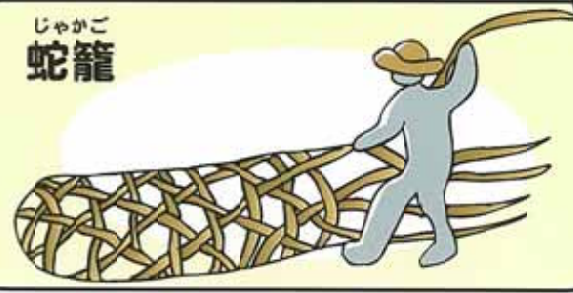
聖牛せいぎゅうの周りには土砂が堆積たいせきして植物が生え、いろんな生物のすみかになるんだよ。



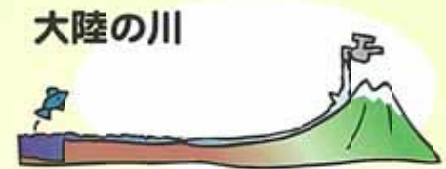
似たものはフィリピン、インドネシア、フランス、スイスにもあるんじゃ。世界各地で水と戦う人々が知恵を絞って生み出した工夫なんじゃよ。



聖牛せいぎゅうは群れて設置されると効果が増すんじゃ。



川ではなく、滝だ!



デ・レーケは、1873年(明治6年)にオランダから西洋式の治水技術ちすいを伝えるために日本に来ました。日本の川はヨーロッパの川に比べて急流で短いため、洪水を防ぐ工事をするのは大変であると言ったそうです。また、「川は、水源から河口までひとつの大きな生き物である。上流や中流に病気があったら、すぐ手当てをする。そうしなければ下流の病気は治せない。」と言いました。つまり、川というのは流域りゅういきすべてがひとつの生き物であるから、山を含めた流域全体でいろいろな対策を実行する「総合的な治水ちすい」が大切であるということです。